



巻頭特集

諏訪神社

千二百年の時を越えて人々を見守る

古くから「駒木のおすわさま」と呼ばれ、親しまれている諏訪神社。そのはじまりは、大同2年(807年)まで遡り、現代に至る長きにわたって、駒木の地を見守ってきました。さまざまな像が建てられた緑あふれる境内は、訪れる人々の心を静かに清めてくれます。





▲建御名方神(たけみなかたのかみ)のまつられた土間拝殿(どまはいでん)。

開 古くから地元で親しまれる 駒木のおすわさま

「駒木のおすわさま」とも呼ばれる諏訪神社は、大同2年(807年)、壬申の乱で活躍した高市皇子の子孫たちによつて、信濃国の諏訪大社のご祭神・建御名方神を祀つたのがはじまりとされています。

後三年の役の際には、源義家が、当時馬の産地として知られていたこの場所ので兵と馬を集め、諏訪神社で武運を祈り、戦地に赴きました。征討後も、同社に詣で戦勝を奉告したといわれています。江戸時代には、水戸光圀公も数度参拝したと言われ、古くから広く親しまれている神社なのです。

もちろん、地元の人々の生活にも深く根づいています。諏訪神社で最も大きな祭事である8月の神幸祭と例祭では、小学生から大人まで、さまざまな人が神輿を担いで街を練り歩き、境内に立ち並ぶ露店や、人々の楽しげな声と表情が、あたりを活気づかせます。今は離れて暮らしていても、このお祭りを楽しみに地元へ集まる人たちも。

お祭りでは人があふれるほどの賑わいを見せる境内も、いつもは静かで厳かな空気に満たされています。「諏訪台地遺跡」と呼ばれる縄文・弥生時代から開けていた場所にある境内は、現在はさまざまな立像が立ち、空と緑に囲まれた美術館のような雰囲気にも包まれています。



▲お話を伺った、宮司の古谷さん。

その心落ち着く空気を求め、朝から夜を通して、境内にはさまざまな人が参拝に訪れます。神社に仕える宮司を始め職員の方々の手によって、美しく整えられた木々や建物は、目にするだけで、胸の内のわだかまりがすーっとなくなるようです。自分の歩く音だけがひっそりと響くような静けさの中、美しい社殿に向かって祈れば、心の底から清らかな気持ち湧いてきます。

訪れる人々は実にさまざま。毎朝の散歩やジョギング途中に立ち寄る人や、幼い子供を連れて緑の中をゆったり歩く人、夫婦そろって穏やかな表情で手を合わせる人など、その姿を見れば、このお宮が地元の方から深く親しまれていることが感じられます。



▶その表情に
心癒されるブロンズ像



▶数多くの美術品

丹

境内のブロンズ像と 豊かな緑が心をなごませる



▶人間らしい表情に胸打たれる
狛犬は北村西望作

長くこの土地を見守ってきた諏訪神社
の特色と言えば、きれいに掃き清め
られた境内の随所に置かれた、い

建築様式を代表する社殿からも、刻まれ
た歴史と美しさを感じることができます。
このようにたくさんのお美術品が置かれ

くつもの美術品の数々。長崎市
平和公園の平和祈念像を制作
した北村西望作「義家献馬
の像」をはじめとして、多く
のブロンズ像や歌碑、たくさ
んの石燈籠などが、訪れる

ているのは、訪れる人の心の平安のため。
優しい目をしたブロンズ像を見つめて心
を癒し、懐かしい童謡が刻まれた歌碑で
穏やかな気持ちを感じ、厳かな建築を見
上げて落ち着いた時間を味わってほしい
と願うが故です。

人々の心を豊かな木々と
ともになごませてくれま
す。まるで美術館のような
空間は、境内だけではあり
ません。社務所の中にも数多
くの美術品があり、江戸時代の

忙しい日々を送る人こそ、神社に足
を運び、鳥居をくぐってみてはいかがで
しょうか。あたりの喧騒が嘘のような静
けさの中、自分を見つめ直す時間が、ここ
には流れています。



▲安産・子育て・健康のお宮としても名高い。

巨匠によってつくられた源義家像。愛馬を見つめる優しい目が印象的だ。

開 新年の幕開けを 清々しい気持ちとともに

諏訪神社のほど近くには、つくばエクスプレスの流山おおたかの森駅があり、あたりは流山市内の中でも、大きな変化がある地域です。周囲が変わっていく中でも、変わることなく、人々の心を清める諏訪神社ですが、変わらないものがある一方、変化の波も訪れています。

周辺に若いファミリー世代が増えたのを受けて増加したのは、お宮参り。生まれたばかりの赤ちゃんを抱いて参拝をする微笑ましい家族の姿は、年々増えてきていると言います。諏訪神社では、詣でる人々の心地よさのため、境内環境の整備を実施。敷地の拡張や木々の整備を行い、新しい時代に応じた対応を行なっています。ただ昔のまま残されているのではなく、時の流れとともにやわらかく変わっていく一面も、諏訪神社が地域の人々に親しまれる理由なのでしょう。

これから、年末から新年に向けての時期になれば、神社にはますます多くの人々が訪れます。大晦日の午後4時から行われる「年越しの大祓」では、茅の輪をくぐって罪穢れを祓い、厄や邪気を託された形代が江戸川に流されます。元旦には、参拝に訪れる人の列が市外から連なるほどの人出が見られ、人々は無病息災・招福を祈り、新年を迎えるのです。

「神社は、参拝する方が、社殿や静かな

柱に囲まれた雰囲気の中で、神々の靈気に触れ、そこに暮らしてきた祖先の息づかいに触れ、心を和め、心を美しくして、明日に向かって踏み出すことができるところを提供するところでありたいと考えています。今回お話を聞かせてくださった宮司の古谷和史さんの言葉通り、「駒木のおすわさま」は、これから先もずっと、人々の心の拠り所として、私たちを見守り続けてくださることでしょう。



▲人々の願いが込められたたくさんの絵馬。